

『往生要集』引用文から見た『宝物集』について（六）

―七卷本巻六相当部分対照表とその言語面の検討―

古田恵美子

The linguistic comparison between the quoted passages in [Hôbutusyû] from [Ôjyôôsyû]
and their original passages in [Ôjyôôsyû]

Emiko Furuta

目次

- 一、はじめに
- 二、『宝物集』『往生要集』諸本対照表および検討
- 三、まとめ

一、はじめに

筆者は、先に『往生要集』引用文からみた『宝物集』について』〔築島裕博士傘寿記念国語学論集〕汲古書院 二〇〇五）、『往生要集』引用文から見た『宝物集』について（二）』（横浜国立大学教育人間科学部紀要9（人文科学）二〇〇七）、『同（三）』（同紀要16 二〇一四）、『同（四）』（同紀要17 二〇一五）『同（五）』（同紀要18 二〇一六）において、『宝物集』中に引用された、『往生要集』および、『栄花物語』の本文の言語上の位相について検討した。右の拙稿では、『宝物集』七巻本で言えば、巻五の終わりまで比較検討した。本稿では、引き続き、七巻本の

巻六に相当する部分について比較検討を行う。現存する一巻本は二種七巻本の巻五相当分で終わっているもので、本稿では、一巻本は比較対照不可能であるため、二種七巻本の内、吉川本を中心に比較対照する。

比較対照の目的は、前稿（拙稿二〇一六）に引き続き、「七巻本に増補されるとき、『往生要集』から内容が引用されたと考えられる部分について、どのような形の『往生要集』が使われたのか」である。今回も、一巻本との比較はなく、七巻本への増補時のみを考えるため、鎌倉期の『往生要集』の形態を考えて比較していきたい。

本研究全体の意図および目的、方法、『宝物集』『往生要集』『栄花物語』の諸本の書誌、依拠した影印本等、それぞれの性格については、右拙稿および拙稿一九九五、一九九一（注一）に譲る。

二、比較対照表

対照表の見方 本対照表は以下の順で示す。

青 『往生要集』青蓮院本 上中下三巻の巻、本文の所在、筆者移点ノートによる訓読文。尚、この本は右側にある片仮名点が主であるが、少数ながら左側に別訓の仮名点が存在する場合がある。左側の訓が『宝物集』の本文に近い場合には（左訓）という形で、括弧に入れて示した。

最 『往生要集』最明寺本 『最明寺本往生要集 譯文篇』（注²）における巻、本文所在、訓読文

西 西南院本 西崎亨一九八九『高野山西南院蔵『往生要集』断簡 付自立語用語索引』における写真番号、行

興 興福寺本 鎌倉期の漢字片仮名交じり訓み下し文。

ここでは、鈴木一男 『初期点本論攷』十九章の翻刻の頁数、行数で所在を表示した。

浄 『往生要集』浄福寺本、上（大文一から二・五）、中（大文四・四から五・三）二巻の巻、『浄福寺本仮名書き『往生要集』影印・翻刻・解説』（西田直樹・西田直敏一九九四）本文影印中の所在、本文

栄 『栄花物語』梅沢本、旧日本古典文学大系（上下）の巻、ページ、行、凡例から復元した底本文

吉 『宝物集』吉川本、新日本古典文学大系本でのページ、行、凡例から復元した底本文

涅槃経 大正新修大蔵経の巻、頁、行（注³）

二、『宝物集』『往生要集』諸本対照表および検討

比較箇所^④ 『宝物集』巻六 『往生要集』大文五―五

青 中六七才 4 心地観経偈（云ク） 在家ハ能ク煩惱ノ因ヲ招ク
最 中六八ウ 5 心地観経の偈に云（く） 在家は能く煩惱の因を招く
吉 二五六ペ 1 心地観経には、「在家はよく煩惱の因をまねく。

青 出家ハ 亦 清浄戒ヲ 破ル（左訓 破ス）

最 出家は 亦 清浄の戒を 破る（カナ訓 破ス）

吉 出家は 又 清浄の戒をやふる」とは申たるなり。

『往生要集』大文五―五「懺悔衆罪」で、「是の如き懺悔には、いかなる勝れたる徳有りや」という問いに答えて、心地観経の偈の一部を略抄引用した部分である。

吉川本は、前章巻五では、偈は漢文の形で掲出されていた。巻六では、『往生要集』からの引用と考えられる部分に就いては、書き下された形で、『宝物集』の文章の中に取り込まれた形で書かれていることが圧倒的に多い。このことについては、本拙稿の最後に考えることとする。

吉川本は「招」「破」が、「まねく」「やふる」と、仮名書きになっている。また、「つみ（罪）」「まづ（貧）しく」「あま（甘）き」「さんけ（懺悔）」「ほんなう（煩惱）」「ほたい（菩提）」等、日常語はもちろん、仏教語の漢語まで、仮名書きである。

此の事は、漢文本を見ていない可能性を示唆している。

新古典文学大系の校注では、この部分に関して、「（心地観経からではなく）宝物集は往生要集からの孫引きであろう」（二五六・脚注一）とされているが、その場合は、耳から聞き覚えたか、仮名に書き下されたものであった可能性がある。

読み下しに関しては、『往生要集』漢文訓読文と吉川本は、ほぼ同じであるが、「破」の訓に左訓ながら、「破ス」という訓が併記されている

ところのみ異なる。ここにサ変動詞「破ス」が併記されているのは、青連院本のみではなく、最明寺本も同じである。漢文訓読では、「破ス」という語を使っているのだが、『宝物集』としては、「破ス」ではなく、「やぶる」を選んで使っているわけである。ここに文体の違いがある。

比較箇所④ 『往生要集』大文十 問答料簡―五臨終念相

青 下六三才6 如^{モ(左訓)}シ、百丈ノ大ナル石ヲ持テ

興 344ペ3 モシ イマ百丈ノイシノ オホキナルヲモ(ツ)テ

吉 二五六ペ6 百丈の石なれども

青 船ノ上ニ置在スルカ如キ(右訓)、没(シ)ナムヤ 不ヤ^イ

興 フネノウヘニ オカシムレハ シツムヤ イナヤ

吉 船筏に つみつれば

青 王ノ言(ハク) 没マ^シ不

興 王ノイハク シツマス

吉 しつまず

ここは、『往生要集』が「生涯一度も善行をしなかったのに、ただ臨終直前に十回だけ念仏を唱えただけで往生できるのか」という問いに答えて、『那先比丘問仏経』を引用して答えているところである。元の文は、那先とミリンダ王の問答になっているが、吉川本は要約し、問答の形ではなくなっている。

二行目、吉川本は「筏」の語があるが、『往生要集』にも『那先比丘問仏経』にも「筏」は無く、「船の上」になっている。此を勘案すると、

ここでは『宝物集』七卷本は、『往生要集』も『那先比丘問仏経』も、本の形では参照していないようである。要約の仕方から見ると、知っていることをそのまま、何も見ずに書いている可能性が高い。

比較箇所④ 『往生要集』大文五―五 懺悔衆罪

青 中六五才4 大経十九ニ云(フ)カ如シ

涅槃経 北本十九卷 大正新修大蔵経十二卷477c19

吉 二五六ペ15 大経に云、

青 若(シ)罪ヲ 覆ヘハ「者」(左訓) カクス者ハ

涅 若 覆 罪 者

吉 若 人 つみをつくりて かくせは

青 罪 則(チ) 増長ス

涅 罪 則 増長。

吉 小罪なりといへとも増長す。

青 発露 懺悔スレハ、罪 即(チ) 消滅スト

涅 発露 慚愧 罪 則 消滅

吉 大罪なりといへとも さんけすれば、則 消滅す といへり

ここは『往生要集』が『涅槃経』の一節を引用した部分である。しかし、『涅槃経』では、四行目「慚愧」が、『往生要集』および吉川本では「懺悔」あるいは「さんけ」になっている。此の事から、吉川本は『涅槃経』の本文は見えていないと思われる。

同じく『往生要集』については、説法、あるいは聞き書き形の仮名書き文を見たか、もしくは先の比較箇所④と同じく、以前、読んだか、説法を聞いたかで、内容を覚えており、その内容を元に、何も見ずに書いたと考えられる。

比較箇所④ 『往生要集』大文十一五

青 下六五ウ7 六ハ 鳩鳥^{チム} 水ニ入レハ
西 三八ー4 六ハ はうてう みつにいるれは
興 三四七ぺ1 六ニハ 鳩鳥 水ニイルレハ
吉 二五七ぺ6 鳩鳥 水にふるれは
青 魚蟬^{ハム} (左訓ハコクリ) ス^{コト}、ク 斃^シヌ
西 うをはこくり ことゝくに しぬ
興 魚 蜂 コト、クシヌ
吉 一切の魚類しし、

青 皆 犀角^{サイ}ヲモテ 諸ノ死(シ)タル者^ノニ触レハ
西 さいのつのをもちて しにたるものにふるれは
興 犀角ヲ モ(ツ)テ フルレハ
吉 犀角 海にあそへは、しゝたる魚
青 還(リ)テ 活^{ヨミカ} ヘル(左訓イキヌ)
西 みな よみかへる
興 モロ、ノ 死シタルモノ カヘ(ツ)テ イキヌ
吉 ことゝく よみかへる。

ここは『往生要集』が『安楽集』にある譬喩を使って、先の比較箇所④の問いに対して続けて答えている所である。要約した上で、引用している。

『往生要集』は、この部分は仮名書き本が二種類残っている。西南院本は院政期書写がはっきりしており、「聞き書き」本である可能性が高い。また、興福寺本は、鎌倉期の成立と考えられるが、寺院内での書き下し文らしく、漢字に忠実に読み下している本である。この部分では、『往生要集』諸本の中でもいろいろな訓みがあることがよくわかる。

特に、「鳩鳥」については、寺院の僧達も知らぬ場合があったと見えて、読みなども分かれている。吉川本は原本を見ていないので確実ではないが、新古典文学大系本によれば、「鳩鳥」になっているとのことであるので、これは何らかの文字を見ていると考えられる。しかし、本を見たとしても、その元本通りではなく、「海にあそぶ」事が補われており、文も短くなっている。従って、自分の言葉で説法などの内容を思い出しながら、意図的に要約したと考えられる。

比較箇所④ 『往生要集』大文五―三 対治懈怠

青 中四六ウ2・4 有ル懺悔ノ偈ニ云(ハク) ―(中略)― 諸仏ハ
吉 二六九ぺ8 ある経には まさしく
青 衆生ヲ視(ソナ)ハスコト 猶 羅睺羅ノ如シ。
吉 見一切衆生 猶如 羅睺羅

『往生要集』のこの部分は、「怠惰な心を抑えるにはどうしたらよいか」の問いに対し、二十もの観想の方法を述べているが、その十六番目

の「悲念衆生」について「ある懺悔の偈」を使って答えている場面である。「仏が衆生を見るのは、釈迦が自分の子供である羅睺羅をみるようである」という意味である。

ここでは、漢字表記のみになっているので、漢文本を参照したと考えられる。巻六に入ってから、漢字のみの偈の表記は初めてである。但し、巻五までは、偈は漢字表記されていることの方が普通であり、栄花物語などでも偈は漢字表記が多い。

比較箇所④ 『往生要集』 大文二一六

青 上五八才 4 樹^キ静ナラムト欲ヘトモ (左訓スレ (トモ)) 「而」

栄 上四五七ペ 4 うゑき しつかならんと おもへとも

吉 二七二ペ 6 行 子路は、「樹 しつかならんとすれとも

青 風停^マ (左訓 ト、マラ) 不^ス。子養セムト欲ヘトモ親^{フヤ(左訓)}待^タ不^ス

栄 かせやます 子孝せんと思へとも おや またす。

吉 風やます。子 養んとすれとも 親またす」 とかなしみ

当該の句は、儒教の中の言葉であり、『往生要集』やその引用仏典の造語ではないが、他に『栄花物語』や『三宝絵』等にも引用されており、かなり広く知られていた言葉のようである。

『栄花物語』に関して云えば、この引用部分は、藤原道長の仏事業について、道長家に仕えていた女房で尼となった人の日記を原資料として書かれたと考えられている。前後の文章からして、明らかに『往生要集』からの引用と考えられ、そのうえ、最も古く原本に近いとされる写本で、この部分の近くで、「法」を「果報」と書き間違えているので、

音を媒介としていると考えられる。(拙稿一九九一)(注1)
当時の(平安後期の初め頃)説法には、頻繁にこの句が引用されていたと推測される。

『宝物集』の場合は、この前の部分に漢籍の引用が多いので必ずしも『往生要集』が典拠とは断定できないが、「子路の言葉」という情報は他本には無く、『宝物集』作者の思い違いか、あるいはそうだとする本が昔には存在したが今は失われているのか、あるいは何かの説法の受け売りなのか、いろいろな可能性が考えられる。

比較箇所⑤ 『往生要集』 大文二一四 五妙境界楽

青 上五一ウ 3 瑠璃ノ池ノ底ニハ水精ノ沙アリ (中略)

浄 上 一一七才 2 りのいけのそこにはすいしやうのいさこあり(中略)

吉 二八三ペ 2 紺瑠璃の池の

青 宝沙^{ヤウ} 映^{ヤウ} 徹シテ深ク照(ラサ) 不トイフコト無シ。

浄 たからのいさこか、やきとほりて、ふかくてらさすといふことなし

吉 ゑいてつせる事を観せよ

この引用箇所は『往生要集』では、極楽の描写の一部である。それに對して『宝物集』では、極楽を観想する方法として描かれている。

吉川本は「映徹」を「ゑいてつ」とし、漢字音で読まれたことを推測させる。文字を見てはいなかったもので、漢字表記にできなかったものと思われる。すなわち、耳から入った言葉を仮名表記したと考えられる。つまり、この箇所も、『往生要集』の文字を見ずに、自分の中にある言葉で書いていると推測される。

比較箇所④ 『往生要集』 大文四―四

青 中一六ウ5 眉間ニ一ノ白毫有リ、右旋テ宛転セルコト

浄 中三一オ2 眉間に一の白毫あり、みきにめぐりて宛転せること

栄 下八五ベ14 みけんの白毫は右にめぐりて宛転せること

吉 二八三ベ9 眉間の白毫の

青 五須弥ノ如(シ)

浄 五須弥のことし

栄 五の須弥のことし

吉 五の須弥のやうなるを觀じ、

この部分、『往生要集』では、仏の三十二相七十二好に就いて述べているのだが、『宝物集』では白毫だけを取り出し、極楽の風景を思い浮かべよと述べている。源信には、『往生要集』執筆前に、『白毫觀法』という著作が有り、これは仏の姿を觀想する方法を、白毫に絞って説いている。あるいは、『宝物集』七巻本の増補者は『白毫觀法』の方を読み込んでいるのかもしれない。その場合、漢文本文を見ているかどうかは確証は無いが、これだけの要約であれば、見なくても書くことは可能であるように思われる。

比較箇所④ 『往生要集』 大文四―三 作願門

青 上八五オ1 一色一香 中道ニ非(ス)トイフコト无シ

栄 下八六ベ10 一色一香 中道にあらずといふ事なし

吉 二八四ペ11 一色一香 無非中道 と觀して

青 生死 即 涅槃ナリ 煩惱 即 菩提ナリ

栄 受想行識もまたゝゝかくのことし

吉 ほんなうと ほしいと一なりと知なり。

『往生要集』のこの部分は、引用文献が無い。また、「一色一香 無非中道」の句は『往生要集』には二箇所あるが、その後「煩惱即菩提」の句が見られるのはこの一箇所だけである。

『栄花物語』では、もう一箇所の方から引用したと考えられる。

『宝物集』では前半部分に関しては漢字のままである。漢字音で読んだ可能性もある。その一方で、「煩惱」「菩提」が仮名書きであるのはやや不思議であるが、「一色一香」は音読の唱え言葉として考えれば、文字になったものを見なくても暗誦できたと推測することは可能である。漢字の難しさから考えると「一色一香」の方が「煩惱」や「菩提」よりも字としては易しいからかとも思われる。

尚、二行目「生死即涅槃 煩惱即菩提」は吉川本三〇三頁四行目にも、漢字文の形で引用されている。但し、句の順番は逆の形である。

比較箇所④ 『往生要集』 大文一―一八 阿鼻地獄

青 上一九ウ5 阿鼻地獄之人ハ 大焦熱地獄ノ罪人ヲ見ルコト

浄 上四二ウ4 阿鼻地獄の人は、大焦熱地獄のつみ人をみることに、

吉 二九八ペ4 大焦熱地獄の衆生は くげんひまなしとはいへとも

青 他化自在天處ヲ 見ルカ如シ

浄 他化自在天處を みるかことし

吉 あび大城の罪人の為には 他化自在天を見るかことし。

『往生要集』が『正法念処経』を引用している部分である。

『宝物集』は、聞き覚えた言葉を書いたように思われる。『宝物集』の元になった説法などは、多分『往生要集』を元にしたものと思われる。

「くげん（苦患）暇無し」が、『宝物集』が補足した情報である。

比較箇所⑤ 『往生要集』大文一一 等活地獄

青 上三才5 人間之火ハ 此レニ比フルニ雪ノ如シ

浄 上5ウ2 人間のひをこれにならふたに、ゆきのことし。

吉 二九八7 人間の火はあつけれとも、ぢごくの火にくらぶれば水のことし。

前の比較箇所④の続きの部分で、同じく『正法念処経』から大意をとって引用したところである。

『往生要集』が「雪」、『正法念処経』は「雲」（大正蔵十七卷二八 a 3）、対して『宝物集』は「水」になっている。「雪」と「雲」ならば、書写違いの可能性はあるが、「水」あるいは「氷」には、書写違いの可能性は小さい。この点で、やはり『宝物集』吉川本の作者および書写者は、この部分に関しては、『往生要集』漢字本も『正法念処経』も見てはいないと考えられる。

自分の知識として記述しているようである。

比較箇所51 『往生要集』大文一一五 人道 不浄観

吉 三〇一ぺ11 次に不浄を観すへしと申は、

青 上三一才1 唯シ 是レ 不浄ナリ（中略）

西 3ー7 たゝこれ ふ上なり（中略）

浄 上六四才3 たゝこれ不浄なり（中略）

吉 我身も人の身も不浄なることを観するなり。

青 三才3 猶、絵セル瓶ニ 而モ糞穢ヲ

西 3ー11 なをし 多かいたるかめに くそを

浄 六四才6 なを 多かけるかめに くそを

吉 たとはは、絵かける瓶の中に もろゝの糞穢を

青 盛ラムカ（左訓 イレタルカ） 如シ

西 いれたるかこと（し）

浄 もれるかことし。

吉 入たるか如し といへる、

吉 こまかには横川の僧都の往生要集にしるせり。

『往生要集』では、人道の相を「不浄」「苦」「無常」の三とし、特に「不浄」に多くの記述をさいている。

それに対し、『宝物集』の方は右の如く、『往生要集』の名を出し、大まかに要約している。また、記述の目的は、住みにくい人間の世界はこりごりだと思ふように思い浮かべて、極楽往生を指向する糧とすることである。したがって、現世への嫌悪感を高める観想をするために最も嫌なところの一部を抜き出してある。

『宝物集』の作者や書写者が『往生要集』を忠実に抜き出そうとする意思はあまりなかったように思える。

比較箇所52 『往生要集』大文五十四 止悪修善

青 中六四才5 貪欲即(チ)是道ナリ。 患癡モ亦是(ノ)如(シ)

吉 三〇三べ6 淫欲即是道 患痴亦如是

句頭、『往生要集』は「貪欲」であるのに対し、『宝物集』は、吉川本をはじめ、この文が現存している諸本全てが「淫欲」となっているというものである。(新古典文学大系脚注三〇三頁八)尚、『往生要集』の方では、その引用文献も含めて、「淫欲」になっている本は無い。

ということとは、かなり早い段階、多分七巻本に増補された段階で、文脈に即した言葉にわざわざ置き換えられたか、あるいは、書き間違いが生じたかのどちらかが起き、そのまま一度も『往生要集』に当たって確認されることも無く、書写され続けた事になる。

三、まとめ

『宝物集』七巻本の巻六における『往生要集』引用文について、まとめておく。

一、巻六では、多くの比較箇所『往生要集』本文および、その引用元の仏典本文とは、文章が細部まで一致していなかった。巻五までと比較すると、かなり大胆な要約、省略、置き換え、文脈転換などが行われていた。

二、漢文本文を見ないと書けないと考えられる部分が殆どなかった。漢文のみ表記の箇所も二カ所しかなかった。巻五までは偈は殆ど全て漢字表記のみであったのとは対照的である。

おそらく、殆ど『往生要集』漢文訓読文は参照せず、講話の聞き書きや記憶を元に書いたと考えられる。

三、本研究は、言葉の細部にわたる客観的な比較を基本にしているつもりであるが、今回の巻六については、比較する本文がかなり違っている。緻密な比較ができなかった。しかし、これはある一つの思想が、書物だけでなく、色々な形で広く浸透し、多くの人々に享受され、言葉の位相が変化していった事を示している。

これからも、広く当時の言語生活全体を見渡す視点で、『往生要集』『宝物集』等の言語を分析・考察していく。

注1 拙稿一九九一 『栄花物語』中に引用された『往生要集』訓読

文の位相に就いて」 山中裕編『栄花物語研究』第三集 高科書店

一九九一年五月

拙稿一九九五 『往生要集』の諸本に就いて『築島裕博士古希

記念国語学論集』 築島裕博士古希記念会編 汲古書院

一九九五年一〇月

注2 築島裕・坂詰力治・後藤剛編 汲古書院 一九九二年

注3 『往生要集』が他の経を引用している場合の典拠・校異は左記の書を参考にした。

『原本校註漢和対照 往生要集』 花山信勝 一九三七年初版、

一九七六年二版 山喜房仏書林